

阪神淡路大震災後 みんなに支えられて成長する

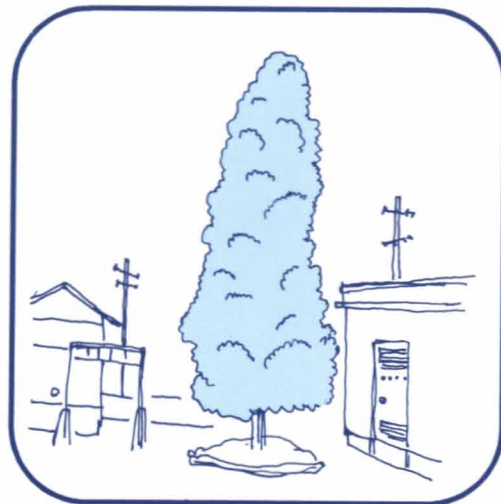
続
おはなし 神戸の なおちゃん

しょうがっこうもつぎまつ
(小学校 卒業)

みんなかえっておいでよ
そして、いっしょに街をつくろうよ。 編



min' na kaetteoideyo soshite issyoni matiwo tukurouyo



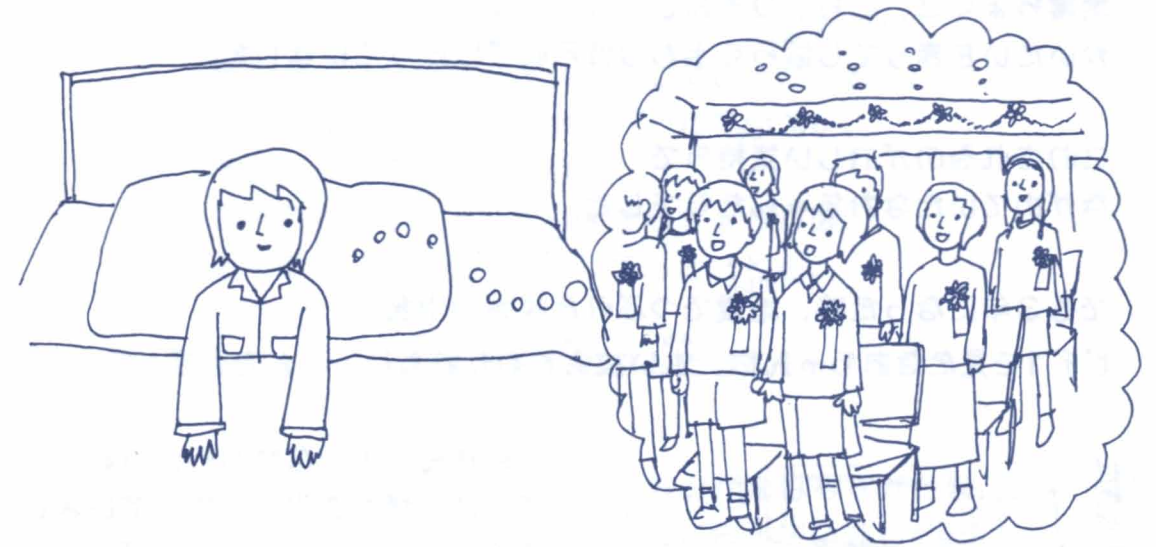
min' na kaetteoideyo soshite
issyoni matiwo tukurouyo

作 池見 宏子
イラスト 池見 民子

そく
続

神戸のなおちゃん

あしたは、なおちゃんが^{しょうがくこ}小学校をそつぎょうする日です。
いよいよ^{じぶん}自分たちのばんがきたのです。



「あたらしい^{こつしや}校舎でそつぎょうができる」
あれからずっとぬがっていたゆめがかなうのだと思うと
なおちゃんは、なかなかぬられません。

なおちゃんたちの校舎は、一昨年の秋やっといっさくぬんあきとさいけんされました。

古い校舎は、なおちゃんが2年生の3学期をむかえた時、あの大震災でぜんかいしたのです。

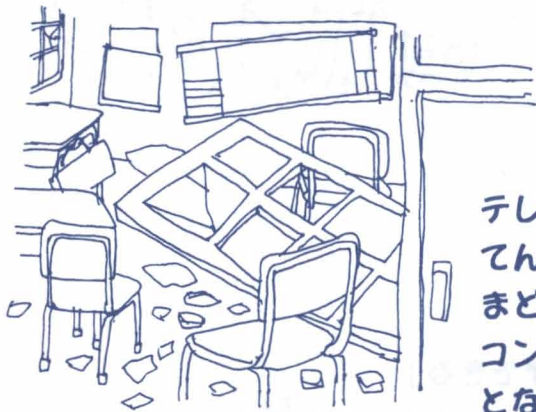


古い校舎…思い出のつまった校舎でした。
中はうす暗く、まどのてつゆくはさびて、
あけしめは少しこわかったけれど、
なおちゃんは、
古い校舎の入り口の広いピロティー、
ろうかかいだんの木のぬくもり、
てんじょうの白いアーチが気に入っていました。

地震ちよくご、たちいりきんしになった校舎が、
かいたいをまってしばらく手もつけられずにたっていました。

こわされるのがおいしい気持ちで
ながめていたなおちゃんたちでした。

でも3年になった時、地震でつぶれた校舎の中を
ビデオで見たなおちゃんは、古い校舎とわかるけっしんをしました。



げんかんの大きなはしらがおれ、
てっこつがむき出しになっていました。
こくばんもけいじばんもはがれ、
うらのコンクリートが見えていました。
テレビがきょうしつのおくにとんでいました。
てんじょうからけいこうとうがたれ下がり、
まどガラスがくだけちり、
コンクリートのかべにあながあき、
となりのきょうしつが見えていました。

みんながベンキョウ中に地震がおこっていたら…
かんがえただけでもおそろしくなるような校舎の中でした。

古い校舎はそんなまま、やく1年間もたっていました。
わかる気持ちになるのにじゅうぶんすぎる時間でした。



学校がひなんしょになったことも、
震災ちよくごの6年生が
青空そつぎょうしきをしていったことも、

ひなんしょから少しずつかせつ校舎ができ
学校がさいかいされふっこうしていったことも、
おんがく会やうんどう会、プールすいえい、
そしてそつぎょうしきなど
みんながあつまってする大きなぎょうじは、
近くの学校のしせつをかりてしたことも、
そのたびに高学年が
いすやいろんなにもつをはこんだことも…

こわれた校舎は1年間、なおちゃんたちのがんばるすがたを
みまもるようにたっていました。

そして、いよいよかいたいこうじがはじまって…、
さらちになって…

すこしずつあたらしい校舎へのきたいがわいてきたのです。

「あたらしい校舎がもうすぐできる…」
そんなきぼうをもって
なおちゃんたちはがんばることができたのです。

そしてなおちゃんが5年生になった年、
やっとあたらしい校舎こくしゃができました。

新校舎しんこくしゃは、前の校舎こくしゃのおもかげをのこした丸まどがある、
モダンな白いたてものです。



校舎こくしゃができたのに、まだかえってこない友だちがいます。
校区の中には、さらちのままの所もあります。
公園こうえんにはかせつじゅうたくがまだたっています。

あれから5年目の春です。
みんなどうしているのでしょうか。

岡山にかそくじゅうで行ってしまったゆうき君。

なおちゃんは、5年生の夏休みなつやすみ、
岡山のおじいちゃんの家に行った時、
岡山に行ったままかえってこないゆうき君をたずねました。

はじめのころ、ゆうき君は
「神戸にかえりたい…かえりたい…」
といてないでいたそうです。

でも、なおちゃんとであった時、
ゆうき君はすっかり岡山べん丸出しの
岡山の子どもになっていました。



たくさん友だちもできて、
“バスケットにむちゅう・”とききました。

なおちゃんとわかる時、
ゆうき君はそっとおしえてくれました。
「お父さんは神戸でしごとをしたいんだ。
しごとと家が見つかったら神戸にかえるかもしれないよ…」

ゆうき君のかそくは、
赤ちゃんもいる6人かそく、
地震じしんの時、
学校のひなんしょにも入れず、
しばらくじどうしゃでぬたそうです。



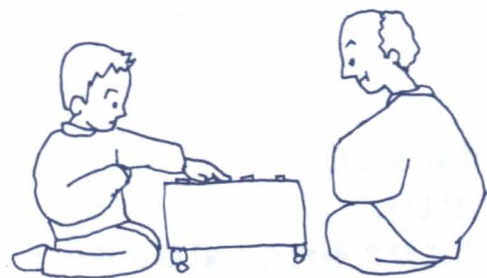
子どものたくさんいる
わかりかそくがすめる家が
なかなか見つからず、
この岡山のあきやの目立つだんちで、
神戸にかえる所が見つかるのをまっているそうです。

お父さんが亡^なくなったこうじ君のことも気になります。

広島に行ったこうじ君のことは、
2年生の時のたん^{にん}山田先生からききました。

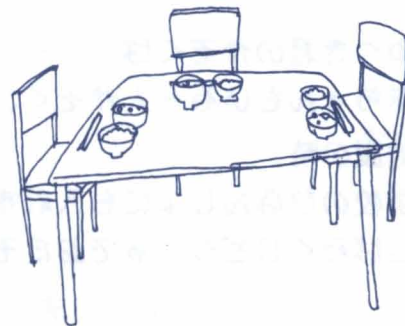
こうじ君といっしょにぬていたお父さんを
ダンスがちょくげきして、
お父さんはなくなられたのです。

お母さんとお兄さんとこうじ君の3人は、
それから1週間^{しゅうかんご}後、
おじいさんおばあさんの待つ^{まち}広島にいきました。



しばらくいっしょにすごしている間に、
こうじ君は、
おじいさんにおしえてもらった
「しょうぎ」がとくいになりました。

3年たってやっと、母子3人で、
近くのマンションにひっこしました。
こうじ君の家のダイニングルームに
大きなテーブルがおいてありました。
地震^{じしん}の時くずれた家の中から持ってきた
たった1つのテーブルです。



「きずがついているけどじょうぶだから、こんど地震^{じしん}がきたら、
この下にかくれるんだ」
と、山田先生^{おし}に教えてくれたそうです。



なおちゃんは、
こうじ君の元の古い家を
思い出しました。

石の門を入ったらいつも、
犬と鳥かごのインコが
むかえてくれる、
古くてあたたかい家でした。

こうじ君の友だちが遊び^{あそ}びに行くと、
お父さんがすもうのあいてを
してくれました。

さいごに子どもにまけてくれる
やさしいお父さんだったのです。



神戸のこうじ君の家だった所はさるちになり、
震災^{しんさい}前のおもかげはありません。

なおちゃんは、こうじ君が 山田先生に、
「神戸と広島、ばいの友だちをたいせつにする」
と、いったことをききました。

こうじ君が 神戸にきたらみんなであおうと思いました。

6年になった時、てんこうしてしまった洋子さん。
いっしょにそつぎょうしようとやくそくしたのに……。

^{こうく}校区にある洋子さんの家のあともさうちのままです。

お父さんにきくと

「^{とし けいかく}都市計画にかかった所は、家をかってにたてられないんだよ」
と、おしえてくれました。

洋子さんはみんなとわかれたくないのに、
ポートアイランドのかせつじゅうたくから、
ポートルイナーをのりついで、
1時間かけてかよう生活がつづいていました。

^{せいしょうねん かがくかん}青少年科学館に行った時、

^{みなみこうえん}南公園のずっとむこうに
かせつじゅうたくがつづいていました。

洋子さんにきくと、

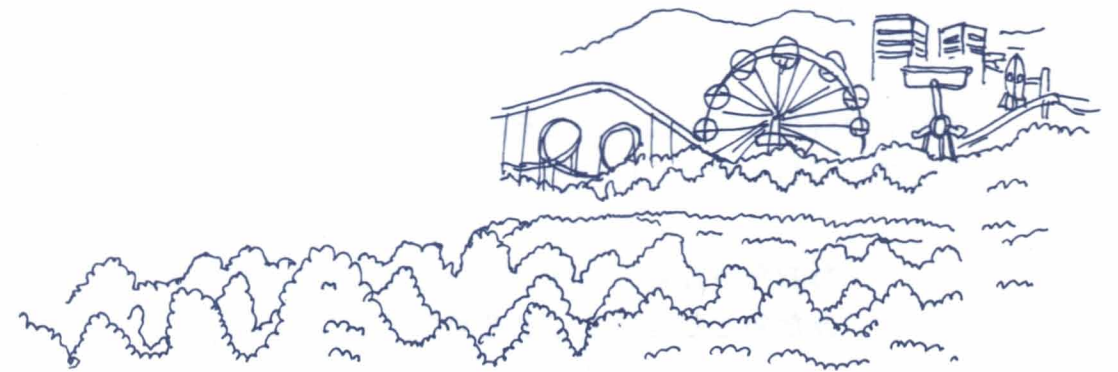
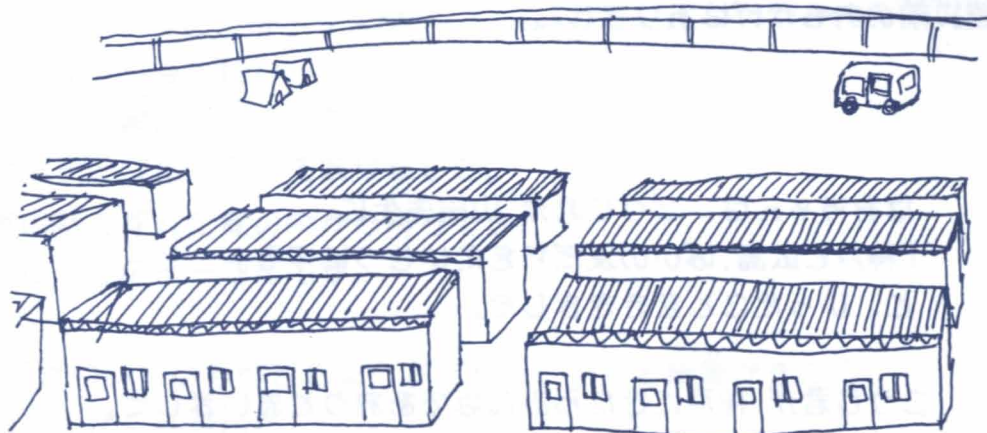
「かせつじゅうたくからえきまで、20分ぐらいあるかな……」

「^{よる}夜はとってもさびしいよ。冬はさむいし、夏はあついし……」

「家の中はせまいので、

しょくじのつくえで、ベンキョウもするのよ。」

と、話してくれました。



^{こうそく}高層マンション、^{ゆうえんち}遊園地をゆけて、
うめたて地のいちばん南にたてられたかせつじゅうたくは、
だんだんあきやがめだち、
さびしくて、ふべんで、きつい所です。
この間もきんじょのおじさんがなくなられたそうです。
家の前にお花がそなえてありました。



ふと^{かんが}考えこんでいる洋子さんに、
どうしたのかきくと、
「近くの学校にかわるかもしれない」
というのです。

今までがんばってきたのに、
「それはないよ」と思わずさげびました。
いっしょにそつぎょうして中学に行けるのをたのしみにしていたのです。

今は、洋子さんはちがう学校でのそつぎょうを
どんな思いでまっていることでしょう。

校区の公園^{こうえん}のかせつじゅうたくもそのままです。
おじいさん、おばあさんはどうしておられるのでしょうか。

学校にひなんしていたよしえおばさんも、
そのかせつじゅうたくにうつったままです。

なおちゃんは、6年生になった夏^{なつ}休み、
友だちとたずねたことを思い出しました。

おとしよりと、体の不自由な方が入っておられる
そのかせつじゅうたくには、
ボランティアのくねたさんが、朝9時から5時まで、
みんなのおせわのためにはたらいておられます。



なおちゃんたちがたずねると、
ちょうど体のちょうしがわるいおばあさんを
びょういんにつれて行って
かえってこられたところでした。

おひるからお茶会^{ちやかい}をひらいてくれましたが、
かぜをひいたり、
ちょうしがわるくてへやから出にくいため、
はんぶんのかたしかあつまれませんでした。

よしえおばさんのすがたが見えないのできくと、
北区のびょういんに、にゅういんされたそうです。

おばあさんたちは
「もう家にかえるのはあきらめたよ。」
「とくべつようご老人ホームがあくのをまってるんよ。」
「私は、ここにこうしてみんなといるのがしあわせ」
というおばあさんもいました。

あらためて、じこしょうかいをしていただくと、
へいきん87さいのお年よりの方々です。

生活を新しいところではじめる気持ちはないという方が
ほとんどでした。



でも、公園^{こうえん}のかせつじゅうたくですから、
いつかとりこわされます。

なおちゃんはわかる時、しんばいになって
ボランティアのくねたさんにきいてみました。

くねたさんは、
「今、みんなですめるグループホームをさがしているのよ。
うまくいくようにおうえんしてね」
と、いわれました。
なおちゃんは、大きくうなずきました。

震災から4年もたつと、はじめのよそうがかわってきて、
みんないきぎれがしそうです。

かえってきたい友だちのきぼうは一体いつかなうのでしょうか。
ゆうき君、洋子さんそして……神戸が好きな人たち……

いっしゅんのうちにおこった地震が、
こんなにも長い間人々をくるしめる「震災」になるなんて……

なおちゃんは、「地震」の事について、
もっとくわしく知りたくなりました。

もう一度「震災しりょうしつ」にしてみました。
そこに「地震」のことがせつめいされていました。

6年生になって、
そのいみがわかるようになってきたのです。

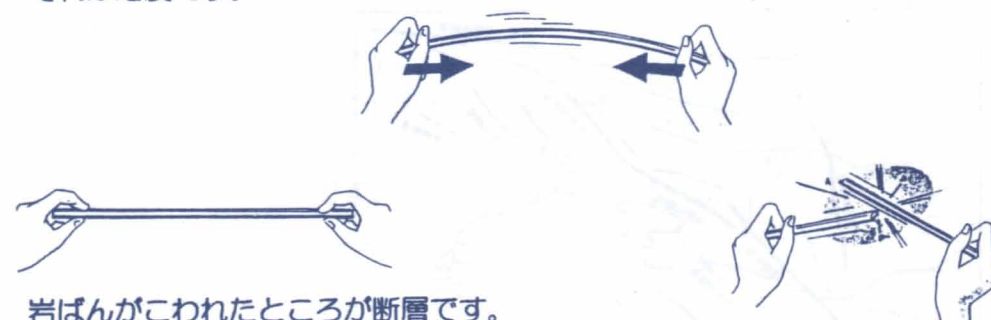
震災資料室



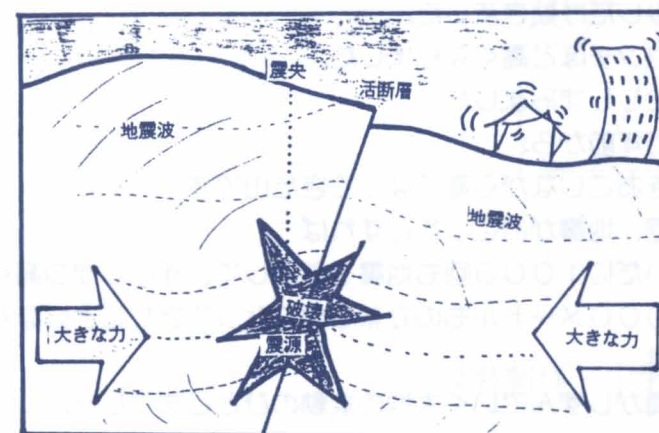
神戸でなぜ大地震がおこったのでしょうか。

1・地震はどうしておこるのか

地震は地下で岩ばんが大きな力をうけてひずみ、
たえきれなくなった時におこります。
ガラスの棒を両手でもって力を加えてみるとどうなるでしょう。
曲がりますね。
力をもっとくわえるともっと曲がります。
そして、いつか折れてしまいます。
これと同じことが、地下でおこったら、
それが地震です。



岩ばんがこわれたところが断層です。
淡路島ではそれが地表にあらわれて、
みんなが見ることができるよう保存されています。
断層は、何百年とか、何千年に1回動くと考えられています。
でも、どの断層が、いつ動くかは、まだよくわかっていません。
日本には、地震をおこす断層が2000ヶ所もあります。
世界でも、地震が一番たくさんおこるところです。
日本のことを、日本地震列島という学者もいるくらいです。



2・たくさんの断層がはしる神戸のまち

神戸にはたくさんの断層があることが知られていました。
多くの人々が生活している市街地の真下や近くに
何本もの断層が走っています。

大地震が起こる前、

「神戸では大きな地震はおこらない」

と多くの神戸の人たちは信じていました。

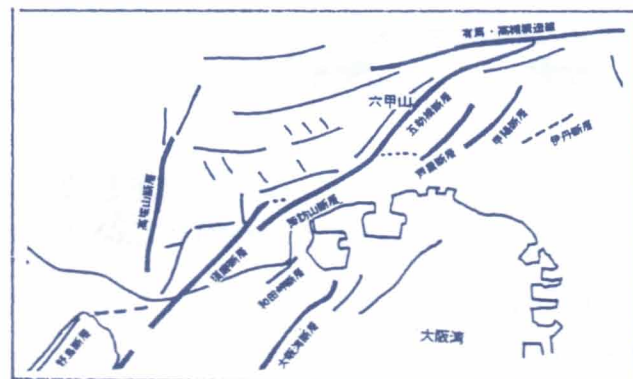
でも、それはまったく理由のないことでした。

神戸ふきんの断層は、さいきん何百年も動いていないので、

近いうちに地震をおこすかもしれないと

心配をしていた学者も少なくありませんでした。

でも、そのことはみんなには知らされませんでした。



六甲山は地震で高くなった山

地震で、大地は少しだけ動きました。

六甲山は、12センチほど高くなりました。

大阪わんは、すこしすみしました。

六甲山は100万年前から、

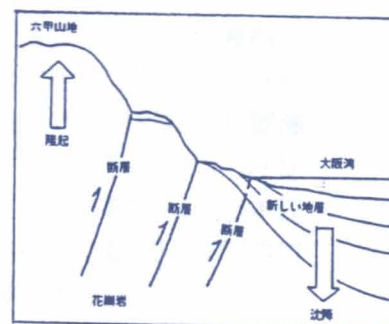
このような地震をおこしながら高くなってきた山です。

1000年に1回、地震がおこったとすれば

100万年のあいだに1000回も地震をおこして、すこしずつ高くなって
いまのような1000メートルもの立派な山になってきたことになります。

兵庫県南部地震は、

山が高くなり、海がしずんでいく大地の変動のひとつでした。



3・大地のことをもっと知ろう

地震のゆれの大きさやはげしさは、

地面のようすによってちがいます。

だから、地震のひがいても地面のようすで

ずいぶんちがっていました。

わたしたちが住んでいる地面の下が、どうなっているかを知ることは
とても大切なことです。

山は、地震によって高くなりますが

水のはたらきで、けずられ低くなってきます。

大雨がふって、がけくずれがおこったり、

こう水で土砂がはこびだされたりします。

その土砂がたまっているところが平野です。

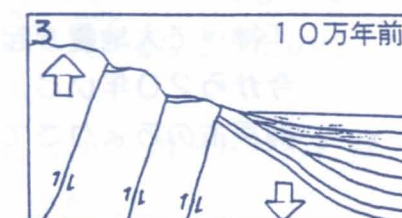
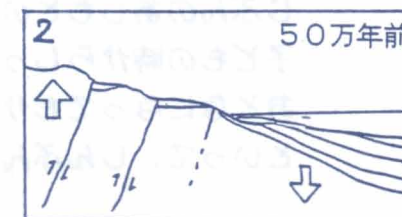
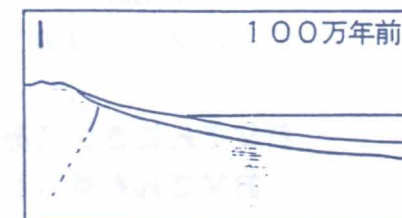
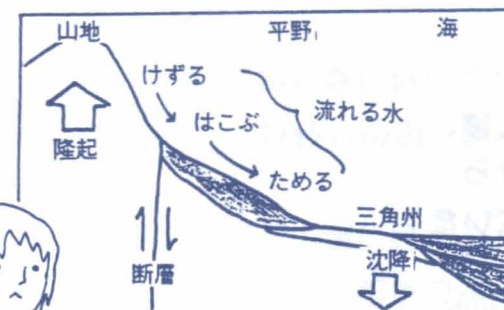
人々が生活している土地は

自然の大きなはたらきによって

何万年も、何百万年もかけてつくられてきました。

そんな歴史をもった大地の上で、

わたしたちは生きているのです。



資料制作・中学校教諭

はしもといたる
青本 格

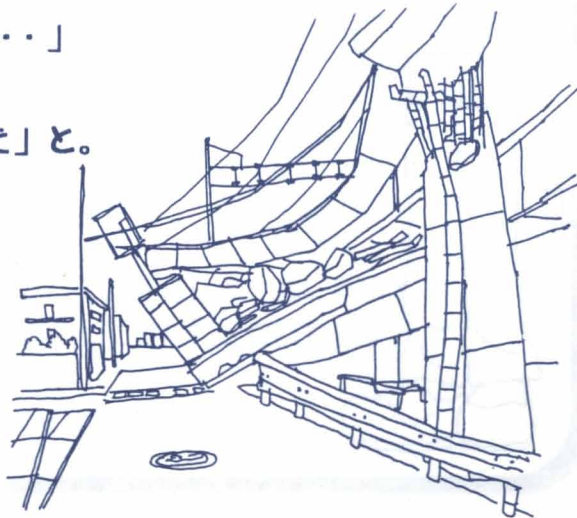
なおちゃんは、
今までわからなかった
「自然のしくみ」を知ることができました。

でも、なおちゃんはふしぎに思いました。
このような「自然のしくみ」なのに、
おとなたちはなぜ、
「神戸で地震がまさかおこるとは思わなかった」
と、口々に言うのでしょうか？

お父さんにきいてみると、
「お父さんもずっとそう思っていたんだよ。
神戸で生まれそだったのに、
じぶんのあしもとの大地のしくみについては、
子どもの時からしっかりおしえられていなかったこと、
おとなになってもかんしんがなかったのがはずかしいよ。」
といって、しんぶんのきじを見せてくれました。

それには、
「神戸で大地震が起こることは、
今から20年いじょうも前から
神戸市のちょうさでわかっていた」

「1975年の地震と同じ震度7以上の地震が、
神戸でちょうど1年後におこったのに、
そのひがいの差はあまりにも大きかった……」
「それは、神戸の街づくりが
震度5をかんがえて行われたけっかだった」と。



二人の話をきいていたお母さんが、
思い出すように話してくれました。

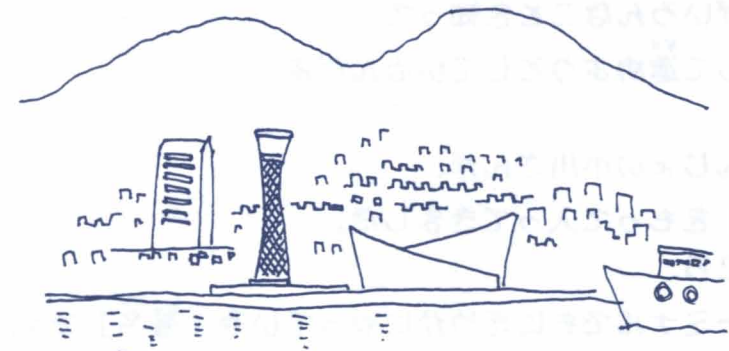
「そうそう、お母さんもはっきりおぼえているわ。
同じ大地震だったのに、
アメリカでの死者はたった61人、
日本では6000人以上だったので
どうしてかしらと思っていたら、
なくなった方々のほとんどが、
たてものや、らっかぶつの下じき、
地震ちよくごの火災によるしょうしだったの。
つまり大地震ではたえられないたてもの、
こうそろになっていたのね……」

なくなられた人たちが、
お年よりと、
わかものが多かったこともショックだったわ。」

あんなにはなやかなイベントをつぎつぎおこなって、
ファッションの街・国際都市神戸をアピールしていたのに、

「山海に行く」海上都市、六甲・ポートアイランドが
みらい都市のように思っていたのに、

「しあわせの村」が、
多くのお年よりのゆめをふくらませてくれる
しせつときたいしたのに…



みんなのくらししていた街が、
きけんでいっぱいだったなんて…



大地震^{じしん}がおこることをかんがえて、
街づくり、家づくりがおこなえていたら…と思うと、
なくなった多くの人たち、神戸をはなれていった友だち、
神戸にのこっていても、
不自由なくらしを今もしている人たちを思い出して、
なおちゃんは、かなしくなっていました。

なおちゃんが、
あまりかなしそうなかおをしているので、
お父さんが、あたまをかきながらも
はげますようにいってくれました。

「この震災^{しんさい}がこんなに大きなひがいを出したのは、
神戸にすんでいたほとんどの人たちが、
いろんなことを知らないでも
へいきになっていたからとも言えるね。

お父さんたちもそれには大いにはんせいして、
これからの街づくりは
自分たちがいろんなことを知って、
なっとくして進め^{すす}ようとしているんだよ。」

そこにきんじょの小川さんが、
「署名簿^{しよめいぼ}」をもって入ってきました。
街のあちこち、
えきのターミナルでもにぎやかにやっている「署名^{しよめい}」です。

なおちゃんもできるのかきいてみると、
「子どもはできないけれど、
これからどんな街をつくるかみんなでかんがえる
たいせつなうんどうだよ。」
といって、そのわけをせつめいしてくれました。

それは、「神戸空港^{くうこう}」をつくるかどうかを、
神戸にすんでいる人たちが
とうひょうしてきめるためのやくそく
・じょうれいを作ってください…という署名^{しよめい}…
つまり、神戸空港^{くうこう}がひつようかどうか、
神戸市民みんなでかんがえて
そのさんせい・はんたいをちよくせつとうひょうで
きめるようにしてほしい。
そのための条例^{じょうれい}を作る「署名^{しよめい}」なのです。

たしか、「神戸空港^{くうこう}」は、
震災前^{しんさいまえ}からつくるけいかくになっていました。

でも震災^{しんさい}後、なかなかふっこうがすすまないで、
「神戸空港^{くうこう}」がほんとうにひつようかどうか
ぎもんをもつようになった人、
つくることになっとくのいかない人、
もっとくわしいことを知ってから
かんがえたいという人など…が、
このうんどうをおこしたのです。



たった一ヶ月の署名きかんでしたが、
「神戸にすんでいるおとな（有権者）の
3分の1にあたる35万人が署名した」
とテレビでほうとうされました。

なおちゃんは、
4年生の時ならった「市会」のやくわりを思い出しました。
「みんなのねがい」は、「せいがん」や「ちんじょう」をして、
市長につたえることができるのです。そして、しみんがえらんだ
「市議会議員」の人たちが、「みんなのねがい」を実現するために
はなしあうことができるのです。

「住民投票」じつげんまでには、

みんなの願いをほんとうにかなえてくれる「市議会議員」をえらんだり、
みんなのこえがちゃんととどく「市会」をつくるなど、
まだまだいろんなてつづきと、多くの人たちとの話し合いがいるそうです。



なおちゃんは、大人の人たちがあの震災ちよくご、
みんなで力を合わせて
がんばっていたすがたを思い出しました。
あの時、
すぐにふっこうが進み、街がかわると思っていましたが、
こんなに年月がかかり、話し合いをつみかさね、
一人一人のなっとくがいるものなのかと思いました。

でも、そんなつみかさねをしてこなかった
お父さんたちおとながはんせいしたけっか、
めんどろでもこのような運動をおこして
街づくりをみんなでかんがえようとしている気持ちがつたわってきて、
そんな「わ」の中にいるお父さんがたのもしく見えました。

そして、いつのまにかななおちゃんも、
これからの神戸の街をどんな街にするのか…
神戸に空港はいるのかな？
「住民投票をもとめる運動」が、どうなるのか
たにんごとでないように思えてきました。

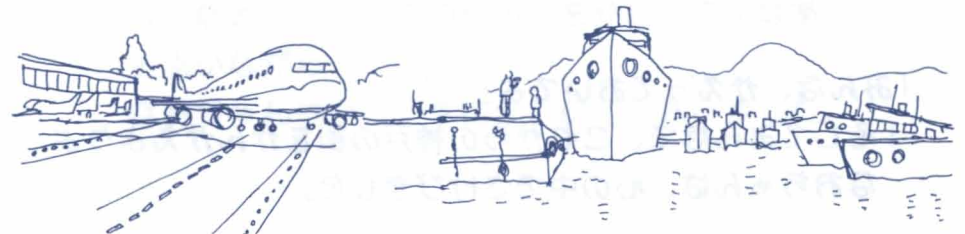
大地震がおこってたくさんのひがいが出たことは、
それまでの街づくりのけっかでした。

そして、震災いごふっこうにこんなに時間がかかっても、
まだかせつがのこり、
さらちがそのままのところがあります。

かえってきたいのにかえられない人たちがいます。

六甲の山にできたがけくずれのきずが
年々大きくなって、大雨がふるたびに、
こうずいにならないかしんばいになってきます。

震災後の街づくりが、これでいいのか…
おとなたちにもっともとききたいことがいっぱい…
震災5どめの春も
まだたくさんのもんだいがのこったままです。

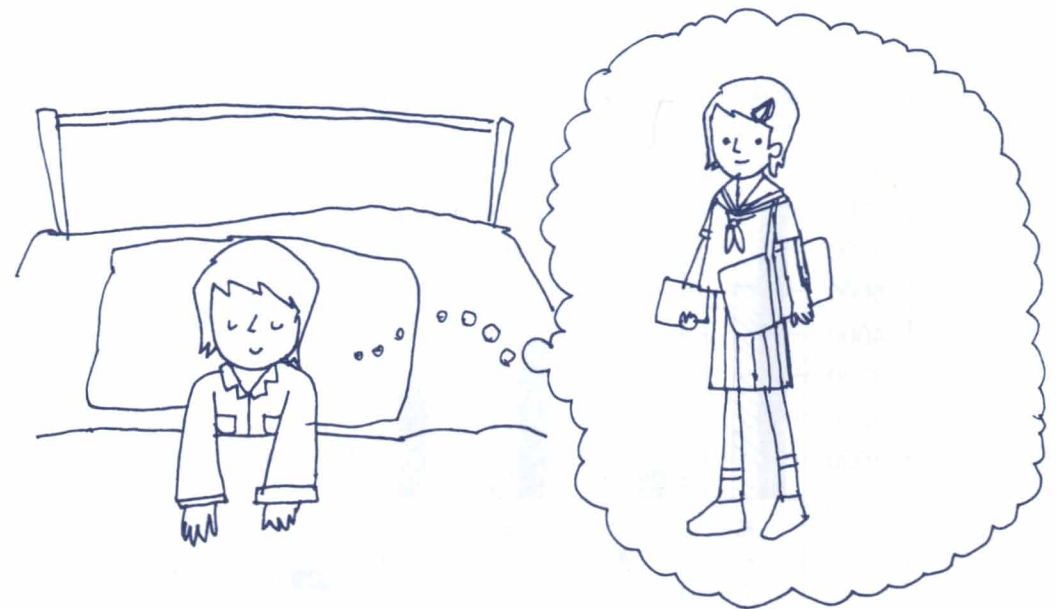


大震災^{しんさい}にも、たえる安全な街づくり…
 だれもが安心してすごせる街づくり…
 そんな話し合いがあると、
 こうじ君かそく、洋子さんかそく、
 かせつにのこっている人たち、
 もとのばしょにもどっていない人たちは、
 きっといっぱい言いたいことがあるように思います。

だからなおちゃんは、
 今、みんなで
 これからの神戸をかんがえようとする「ゆ」が
 ひろがっているのがうれしいのです。



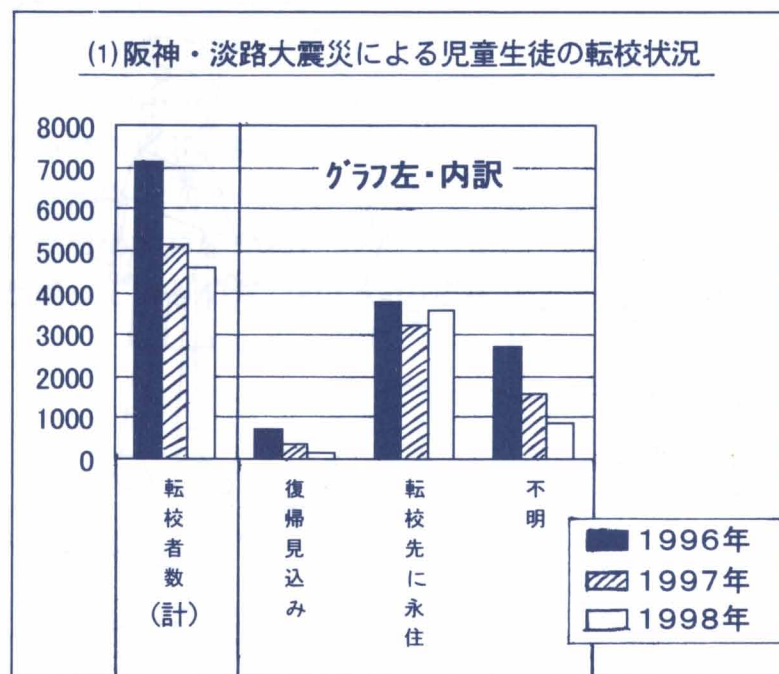
「みんな、かえっておいでよ」
 「そしてみんなで、これからの神戸の街をかんがえようよ。」
 なおちゃんは、心の中でさけびました。



中学生になったら、
 もっとくわしく
 「歴史^{れきし}」「地理^{ちり}」「大地^{せいち}」「政治^{せいじ}」…など
 いろんなことをべんきょうして
 みんなと「神戸の街のゆめ」をかたりたいなあ…
 と思いながら
 なおちゃんはいつのまにか、ぬてしまいました。

阪神・淡路大震災の影響による 小・中学校の児童生徒の状況に関する調査について

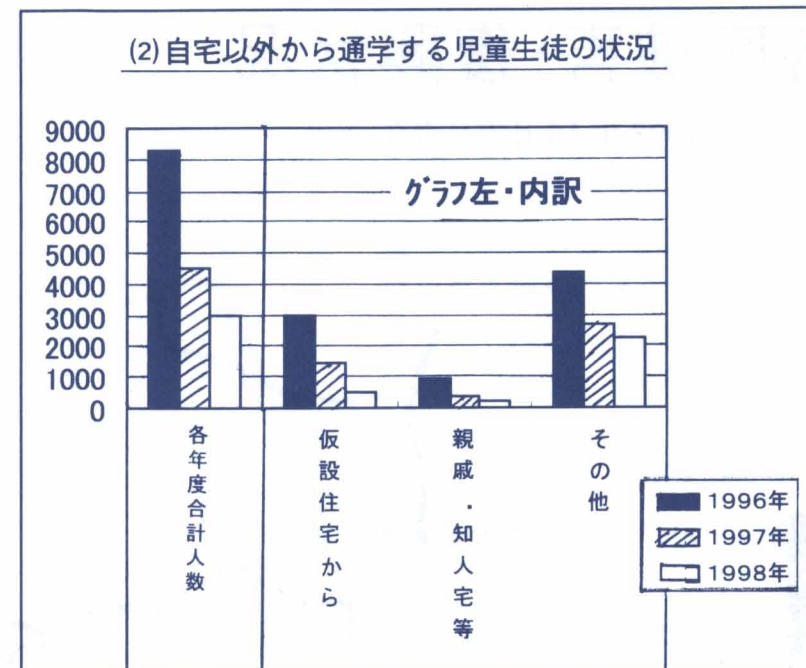
(兵庫県教育委員会・1998年7月1日現在)



- 震災による転出児童生徒数が復帰や卒業などにより前年度比566人減少し、4567人となっているが、減少数は少なくなっている。
- 転校先に永住する児童生徒が増加しているが、復帰見込みと不明な児童生徒を合わせた1021人(22、3%)が元の学校へ復帰またはその可能性がある。
- 復帰見込みの不明な児童生徒が860人(18、8%)あり、今なお不安定な生活基盤にある児童生徒が多いことをしめしている。

(1) 阪神・淡路大震災による児童生徒の転校状況

	1996年7月1日現在			1997年7月1日現在			1998年7月1日現在		
	県外転校	県内転校	合計	県外転校	県内転校	合計	県外転校	県内転校	合計
転校者数(人)	3057	4094	7151	2056	3077	5133	1575	2992	4567
復帰見込み	279	410	689	145	237	382	74	87	161
転校先に永住	1864	1885	3749	1289	1907	3196	1092	2454	3546
不明	914	1799	2713	622	933	1555	409	451	860



その他の主な事由

- 震災前に持ち家に居住していた被災し、自宅を再建する予定であるが、現在借上住宅に仮住している場合
- 震災後家族が分散し借上住宅等に居住しており、当該住宅が生活の本拠となっていない場合

- 仮設住宅から通学する児童生徒が、前年度比967人減少しており、復興恒久住宅などへの転居が進んでいることを示している。
- 校区外・区域外から通学する児童生徒が前年度比863人減少しており、本来の通学区域への通学に移行していることを示している。
- しかしながら、今なお2947人の児童生徒が、仮設住宅や校区外区域外から通学し不安定な生活環境におかれ、あるいは遠距離通学を強いられており、それらの児童生徒に対する配慮・指導は引き続き必要である。

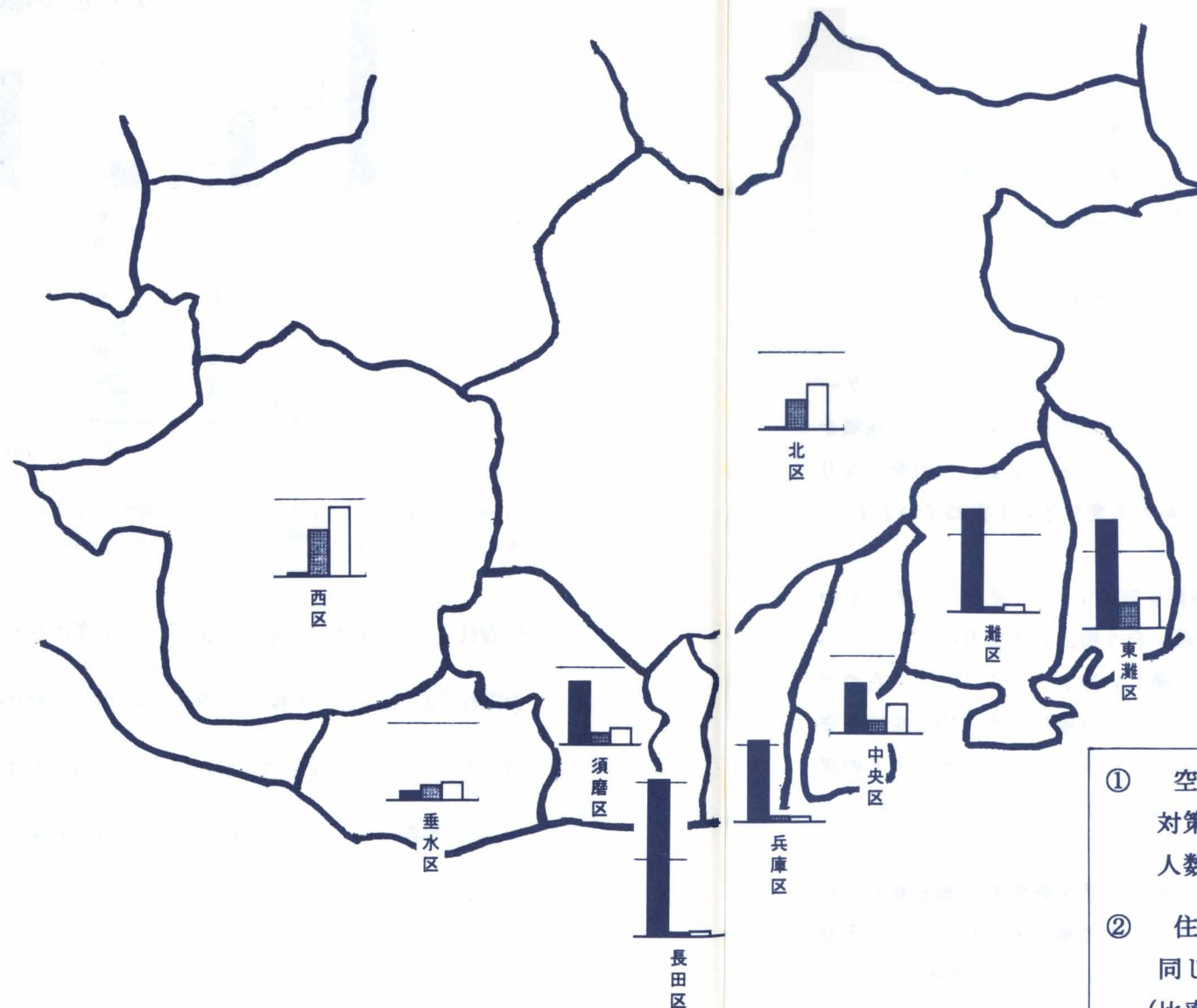
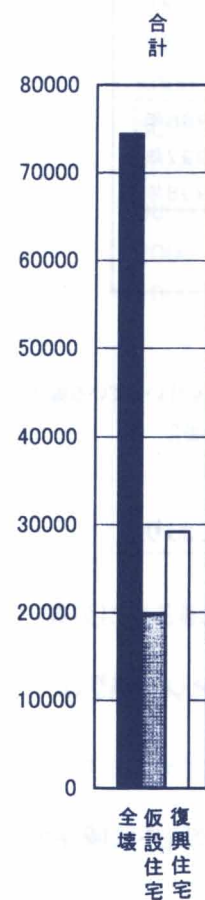
(2) 阪神・淡路大震災による影響により

自宅以外から通学する児童生徒の状況

	1996年	1997年	1998年
計(人)	8260	4521	2947
仮設住宅から	2940	1465	498
親戚・知人宅等	947	347	191
その他	4373	2709	2258

各区被害・復興状況

1998年10月末日現在



- ① 各区の被害状況では、長田区が全体の27%、東灘区が、19%、灘区が、18%・兵庫区が14%と、神戸市市街地の東が全壊家屋が多いのに、仮設住宅は、一番西区が多く、次に北区と、被害の少なかった所に建てられている。
- ② また、その後建てられた復興住宅も、被害の少なかった西区・北区が多い。
- ③ このことから、被災者が元の居住区に戻るが大変困難な状況がうかがえる。

仮設住宅から復興住宅へ 移行過程で生じた問題の一部

- ① 空き家が増え、安否確認、防犯・防火などの対策も含め、居住者の様々な「相談」に乗ることが、人数が減ったこととは逆に困難になってきている。
- ② 住宅確保の進み具合が、仮設住宅（地域ブロック）毎に同じ規模でスタートしても、住宅確保ができない世帯数（比率）に差が出てきている。（1998年12月9日）

仮設住宅ネットワーク機関誌より

事柄	北区	西区	垂水区	須磨区	長田区
死者	11	10	16	383	907
全壊	272	436	1177	8103	20280
仮設住宅	3800	6000	1900	1500	500
復興住宅	5838	8941	2308	2125	647
入居済・待	1684	3481	586	998	432
未・待	392	445	80	202	114

兵庫区	中央区	灘区	東灘区	合計
540	239	923	1455	4484
10473	6411	13223	14021	74396
700	1600	600	3300	19900
654	3796	986	3883	29178
532	2240	380	1277	11610
112	588	96	381	2410

「なおちゃん」にお手紙をくださったみなさんへ

神戸のなおちゃんに思いを寄せて、大震災の学習をされた事を、とてもうれしく思います。なおちゃんたちが体験した大震災は、今まで築いてきた生活が崩れ、かけがえの無い命が奪われ、何もかも失う恐怖、悲しさ、それは言葉で表わし尽くせないものでした。

でも、どんな大災害をも乗り越えようとする人間のエネルギーになったのは、そして小さななおちゃんたちを支えたのは、実は、家族や友達の励まし、近所の人たちのコミュニケーション、見知らぬ全国の方々の思いやりの心、優しさだったのです。あの時、生き残った多くのものは、あの自然の力の前で、死んでいたのは自分だったかもしれない……「自分が生かされている思い」を実感しました。そして困っている人にやさしくなりました。自分を必要とする人に力を注ぐことが生きる喜びになったのです。思いやりの心が持てたのです。

しかし神戸では震災直後せっかく人々に生きる勇気を与えた人々の思いやり、コミュニケーションが、避難所を出ても地域に帰る所が無い街づくりをしてきたために、今もなお、地域から遠く離れた仮設で、県外で暮らさざるをえない人たちがたくさんいるのです。元の街に戻りたい、切られたコミュニケーションを取り戻したい、そのための大変な苦勞を重ねています。

災害に強い街づくりとは、華やかなイベントが行える施設を建設したり、見せかけの新しい街をつくるのではなく、そこに住む人々の普段からの心が通い合う街、お年寄りの方、体の不自由な方、子どもたち、弱い立場の人たちが生き生きできる優しい街をつくることだったのです。誰もが安心して暮らしていける街、それが憲法で保障された生存権や、文化的な生活を守る人権を大切にしたい街づくりだったのです。神戸の者は、震災後も仮設での孤独死、多くの震災関連死が続いている現実の中で、その事に気づき、訴える声が日増しに高まっています。

もう一つ大切な事は、人間も自然の営みの一部であるという事、自然を科学的に知る事の大切さでした。今回の地震も起こるべくして起こった地震だったのにその事を大人がしっかり学習して街づくりに十分生かしていなかった事から大震災になってしまったのです。今神戸の者は、その事も反省してこれからの街づくりに生かそうとしています。神戸のなおちゃんたちは、ふだん当たり前の生活の中で気付かなかった大切な事を、何もかも失う中で知りました。

皆さんには、何もかも失わなくても、このような災害にあわなくても、普段からの人々の思いやりの心が伝わる街、そして自然を大切にしたい優しい街づくりをしてほしいものです。

神戸の復興はまだまだ時間がかかりますが、「誰もが生きていてよかったと思える街づくりをしたい」この共通の願いを大切にお互いに頑張りましょう。その事が災害で亡くなった多くの方々の叫びに応える事になると思います。

池見 宏子



あとがき

1995年1月17日、あの阪神淡路大震災から5年目になります。
当時1年生だった子どもたちが最高学年6年生に、あの時2年生だった「なおちゃんたち」は小学校卒業を迎え、いよいよあの震災を小学校在学中に体験した子どもたちが少なくなり、過去のものになろうとしています。

貴重な体験を忘れて欲しくない、希望をもって生きて欲しい……そんな願いの中から生まれたお話「神戸のなおちゃん」でした。

この4年間、「なおちゃん」は、「阪神・淡路大震災仮設支援 NGO 連絡会」のボランティアの人達によって全国に紹介され、神奈川からは「紙芝居」になって返ってきたり、九州では「大型絵本」に変身したり、京都では学校の授業の中で「語り部」として活躍したり……いろんな形で、全国の皆さんの手で育てていただきました。その間、寄せていただいた励ましのお手紙へのお返事を裏面に載せることで、その感謝の気持ちを伝えさせていただきたいと思います。

そして「おはなしの続きを求める声」と、「どうしても伝えなければならない思い」が重なり、この度の、続・お話「神戸のなおちゃん」として、発行することができました。

このお話のメッセージは、あれからのなおちゃん達が、年月が経っても、なかなか進まない身近な友達やお年寄りの復興の様子・つらい生活の中から、あきらめないでどうして頑張ろうとしているのか？お伝えしたいのです。

それは、年月が経って、人々が懸命に生きてきた中から分かってきた本当の復興を求める姿でした。

本当の復興は被災者の最後の1人の叫びまで聞き取って、これからの街づくりに生かす事ではないでしょうか？

「住民投票」を求める運動の原点も、このような悲しい事を二度とくり返さないために、大切なことは「住民自身が決めたい」という強い思いから発展した運動だと思います。だから35万人余りの署名を書かれた方々の思いを大切にこれからの運動を進めて欲しいのです。

この続・お話「神戸のなおちゃん」には、被災地の子どもたちに現実的な希望を繋げるものとして、新しい神戸市民の運動・これからの神戸を思う大人達の真剣な姿に期待が込められていることを付け加えます。

最後に、文中の震災資料の部分を執筆して下さった榎谷中学校の齋本格先生、資料提供の神戸新聞社関係者の方々のご協力に感謝します。

(震災5年目を迎えて・1999年1月17日 池見 宏子)

続・お話「神戸のなおちゃん」

1999年1月17日（第一刷発行）

神戸市立小学校教諭 池見 宏子（著）

デザイナー 池見 民子（イラスト）

自宅 〒657-0024

神戸市灘区楠丘町 6-4-12

TEL・FAX 078-841-0116

印刷 共同出版印刷

取扱事務局 「被災地 NGO 協働センター」

TEL078-685-0068 FAX078-685-0071

